

# キリスト正教 (Catholic) を中心とする 宗教服について

齋 藤 茂 尾 中 明 代

## 総 論

前に本学紀要第一報に続き、その第二報に手をつけた。

服飾史の研究は、単に服飾の範囲内に止らず、広くその時代の政治、経済、一般社会の動向と直接、間接に密接な関連をもつものであることは今更言を要さない。

我々は Christian ではない。しかし人間の世の中で信仰と云うものが占める比重は、時代をさかのぼるほど増大する事を感じる。神学を知らず、科学を深く知り得なかつた昔の大衆はその生活の大部分を信仰に托した。かくてヨーロッパの大衆の日常生活は、東部、西部を通じてすべて Christ 教会と結びついた。従つて各教会の預り主は、大小、高下を問わず、人々の生活に支配権を握つた。この預り主等の最大の Peak はローマのパトリアーク (Patri-arch) たるローマ法皇 (Pope) である。

中世を通じてローマ法皇の権威はかくて、絶対となつた。それは神に通ずるからである。かくて西部ヨーロッパは皇帝や国王といえども、遂には法皇の下風に立たざるを得ない、法皇の地位は現世的には King of Kings である。つまり現世の (又は現実の) 世界の覇者たる彼等は信仰の世界 (全西部ヨーロッパ) の覇者たる法皇に頼らざるを得ない。東の教会 (Orthodox 派) では、それが名目であつたにしても、教主は同時に Byzantin 帝国の皇帝であつた。かかる事情から皇帝、国王等の服飾は、法皇、教主の衣冠式服の模倣か、或はそれと同一となる。従つてその下につく僧正、百官臣僚等の服飾の標準も自然に教会に準ずることとなる。かくする事によつて、為政者等はそれぞれの国民大衆に対し威容を示し得たのである。かかる事情から、中世から近世への服飾は宗教服飾を中心とする上流服飾に標準がとられる事となるのは、けだし止むを得ないと考えられる。ところで時代は下つて、十字軍の失敗 (13世紀)、宗教改革と新教の勃興 (16世紀) は Christ 教、殊にローマ正教に大きく響いた。法皇の権威は傾いた。法衣 Mode は軍服や各国の国民服にその座を譲り渡すほかはない、更にアメリカ独立、フランス革命、Napoleon I の出現と18世紀、19世紀の世界は大きく揺れた。科学と自由の世界は来た。更に一転して唯物史観、スプートニックの時代と世界は目まぐるしく変つて行つた。

然し世の中が如何に変わろうとも大衆の心の中には一抹のさびしさは残る。ニューヨーク、ロンドン、更にモスクワにおいてさえ、日旺の朝教会の鐘は鳴る、それは博愛と平等、そして平和の響きである。斯う考えてくると、信仰と時の流れとは矢張り不束不離である。つまり封建の昔とは又別の角度から大衆相手の信仰の世界は客観されるべきではあるまいか。法服の研究を続けている時、20世紀と教会と云う、矛盾を感じながらも、又別に人間性と云う角度から、はなはだ漠然とはあなが、教会僧服の社会性 (上は Vatican や Westminster から下は津々浦々の諸教会に至るまで)

順応性に思を致し、あえてここに筆をとつた次第である。

## 聖職服飾分記

聖職者の服飾というものは、元来は、ローマ共和政末期庶民の服装から生れたものであり、それが後に教会の式服、祭服になつたのである。

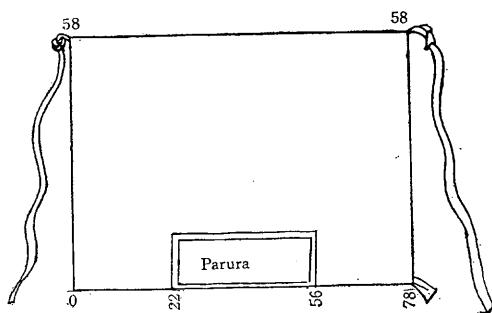
キリスト教僧侶は第7世紀までは、東西両派ともほぼ同一の服飾をしていたが、カロリಂಗン王朝時代にはいり、初めて特色が現われ、その後種々な変化を見、多くの添加物を生じた。古くはステフェン法皇(237年没)の前までは僧侶は教会外でも僧服を着用していたが、この法皇により、平素は礼拜用衣服を着用してはならないと定められこの後僧侶は二種の服を用いることとなつた。一つは祭式用、一つは家庭用と、外出用を兼ねる。

僧侶は上下を通じ、すべての代表者であるがゆえに、その礼拜服飾には、各僧侶の着る衣服の徽章を兼備させたのである。

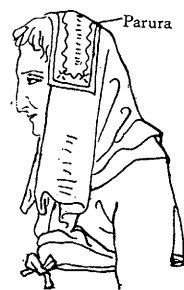
祭服は西方のローマ教会の典礼用として、豊かに発展した。東方のギリシャ教会では、9種の祭服が有るが、ローマ教会では、18種に達した。以下、大司教ほか司祭、助祭などの祭服について、その着用の順に従い、述べることにする。

### アミース (Amice)

司教が頸につける徽章であつて、8世紀から用いられたが、10世紀までは別に徽章としての装飾ではなかつた。それがひとたび徽章として用いられるようになると、長方形の刺繍をほどこした絹のパルラを前中央に縫いつけた。(第1図、第2図)、後16、7世紀になると約4cmの十字架を刺繍するふうが行われパルラは用いられなくなつた。アミースの材料は美しい麻で作られ、17世紀まで用いられた。



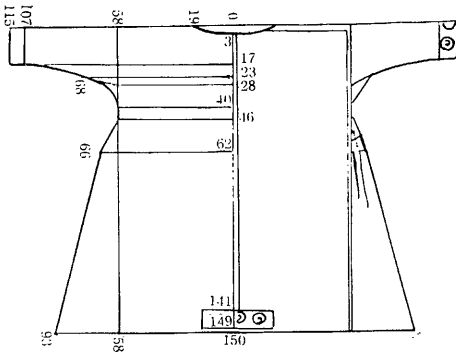
第1図



第2図

### アルバ (Alba)

最も古い僧衣の一つで、ローマ人はこれを衣服として用い、ツニカと呼んだ。アルバの形は中世期を通じ、古代と形は変わらず、そのまま使用されていたが、近世に入り初めて二、三の変化を現わしたのである。それは裁方よりも装飾に関する点である。アルバを初めて僧服としたのは法皇グレゴリオ(590年—604年)である。身幅はゆるやかに脇を斜にして裾幅を広くする。もし材料の布幅が狭い時は両脇にまちを入れた。衿ぐりを大きくあけ、袖は袖付をやや広く袖の方を狭くした。丈は足首に達する長さであるが、誰にも着られるようにするため、普通には丈を長くし Cinglum (紐でたくして着られるようにする。第3図のアルバは14世紀のもので両脇に赤で十字形の縫飾を施してある。アルバの色は白で15世紀までは美しい亜麻製と規定され司教は白絹を用いた。10世紀には



第 3 図



第 4 図

14, 5世紀のストラとマニプルスは幅は10~12cmとなり、ストラの丈は、265~275cmで、非常に立派な装飾を施し、端には、金糸または銀糸の房をつけた。16, 7世紀には、ストラとマニプルスの先端の幅を広くして、金の房をつけた。16世紀の末には、ストラとマニプルスの各中央と両端には、小十字架をつけることが一般に行われ、大司教、司祭、助祭の祭服の一つとして用いる。司祭はストラを首につける時これを頸から垂らして、胸で十字に交叉し、チングルムでおさえた。(第5図)大司教はその胸の上につける十字架があるから、交叉せず垂直にたれる。助祭は聖祭中の輔佐をする動作が自由になるように、左の肩から斜にかけ右脇下でとめる。

#### マニプルス (Manipulus)

11世紀までは長さ約1m、幅18cmのリネン製の汗拭いであつたが、グレゴ

すでに裾と袖口に立派な金糸刺繍を施し、長方形の  
パルラをつけこれを主要な装飾とした。このパルラ  
の色と形は、アミースのパルラと同一のものである。  
アルバの白は潔白を示し、克己をも意味するもので  
ある。

#### チングルム (Cingulum)

チングルムをしめてアルバの丈が長いのをたくし  
あげ、またストラにかけて動かぬようにして結び下  
げる(第4図)昔は麻で作り、幅は広くせず、4,  
5cmで装飾も加えなかつた。しかしカロリング  
時代(9世紀頃)に入り初めて形を立派にしはじめ、

ことに法皇服のものは立派であつた。当時大司教の紐は丸く作り、金材を  
用いた。15世紀には丈を昔よりもはるかに長くし、その先に房を飾つた。  
16世紀以来、平帯は徐々にすたれ、紐形により合せたものを用い、先には  
房をつけた。

#### ストラ (Stola)

初めは丈の長い幅のゆるやかな衣服であつた。ローマの初期には主として  
既婚婦人が使用していたものである。共和政の滅亡後になるとストラは、  
しやれ者とか、金持、僧侶の間で行われたが、遂には皇帝が着用するよう  
になつた。

キリスト教徒は以前からストラを使用しており、色を異にする二条の飾り  
紐をかけていた。グレゴリオ大法皇(通称 Hildebrand)時代(1073~  
1085)が終るまでは、上記のような形であつたが、この時代に至り、広や  
かなストラの代りにこれより狭いアルバを用いるようになった。このため  
ストラの飾りであつた長紐はアルバに使用しこれが独立した装飾となつた  
もので、輝ける衣であり、不死の意を示すものである。

10, 11世紀のストラは長さ約3m、幅6~12cmの絹で作つた。15世紀  
にはストラは次にあげてあるマニプルスと共布で上着



第 5 図

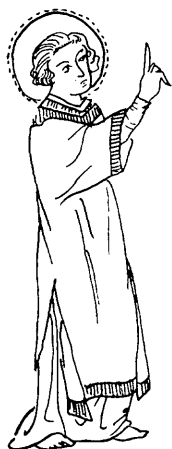
リオVII大法皇以降広く行われた装飾であつて、長さ約1m、幅10cmにて、左手首に輪にしてつけるようになった。大司教、司祭、助祭によつてミサ聖祭に用いられるマニプルスとは、束の意で、働きの労苦とその報いとを意味するものである。

### ダルマチカ (Dalmatica) とツニクル (Tunicle)

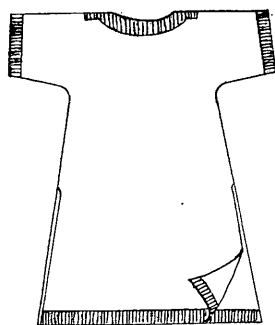
ダルマチカの名称は、その地名からきたもので、その地方の人の普通の着物であつた。アルバより短く、広い袖がついており、着るのに容易なように、両脇にスリットがある。第6図は受胎告知の天使をあらわしているが、この天使の着ているダルマチカは、後に見られるような長方形の飾りでなく、縁とりで飾つてある。第7図、第8図は13世紀のダルマチカの図であつて、袖の端に付けられた飾りの他に、前面と背面に横縞で結ばれた2本の上から下に走つた装飾の縞がみられるのが特徴である。この2本の線はもとは葦赤色であつて、キリストが我等のために流された聖血を象るもので、救霊の喜びと正義とを意味するものである。

中世に於ては、司教はツニカをすて、ダルマチカだけをアルバの上に着用することも、まれではない。ダルマチカとツニカが何時の頃から副助祭の制服となつたか、明らかでないが、チャールス大帝の時にも一般に、この種の服を用いていた。ダルマチカは、ツニカの上に着るものであつて、ツニカの方が、丈が長く、幅が狭く細い袖をつける。第8図は、14世紀の副助祭の服装である。

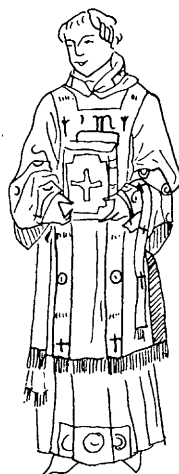
ダルマチカの裾には房や鐘を飾につけたものもあつたが、普通には多色の広い、絹房をつける。なかには単に紐をつけたものもあつた。第9図は13世紀における大司教の服装である。



第6図



第7図



第8図



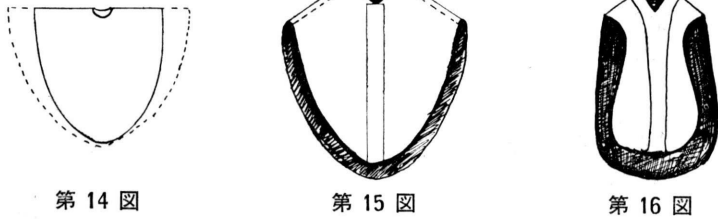
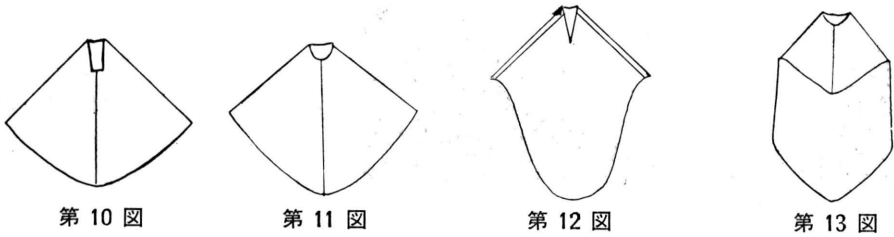
第9図

### カズラ (Casula)

カズラは元来、アルバや、ストラのように、ローマ人が共和政末期に、使用していたものであるが、当時のものは、鐘形で、衿ぐりを中心にあけた円形のもので、体全体を被うように大きく作られており、これに頭巾をつけたものもあつた。裾は膝に達し、主に、天气の悪い時に用い、マントのような風俗の一つで粗製材料で作られ、Paenulaとも呼ばれたが、後世には専らカズラの名をもつて、よばれるようになった。後になると、キリスト教僧侶が愛用し、儀式に着用するようになり、約6世紀頃には、僧侶の祭服となり、僧侶を特表する衣服となつた。そして一般の人は一切これを用いる事ができなかつた。

カズラは初め、ミサ執行中に、これを輔佐する助祭、副助祭が、両脇を支えあげていたが、14世

紀半頃から、両脇を切りつめた形となり、約16世紀頃までに現在のような形になった。カズラの生地はもとは厚手の織物を用いたのであつたが、動作上不便であつた。カズラの裁断は、様々に変つた形にカットされたものが生まれ、11世紀頃からは衿ぐりは半円形になった、(第10図, 第11図) また両側が次第に短くなり、前と後とで、長さが違つた。最後には第15図, 第16図に見られるような形になった、第12図は、13世紀の式服で肩に縫目がある。第13図は大司教の式服, 第14図は司祭の式服である。

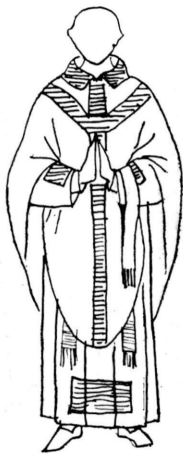


第17図は大司教, 第18図は司祭の式服であり, 写真ABCはカズラ, ストラとマニプルである。

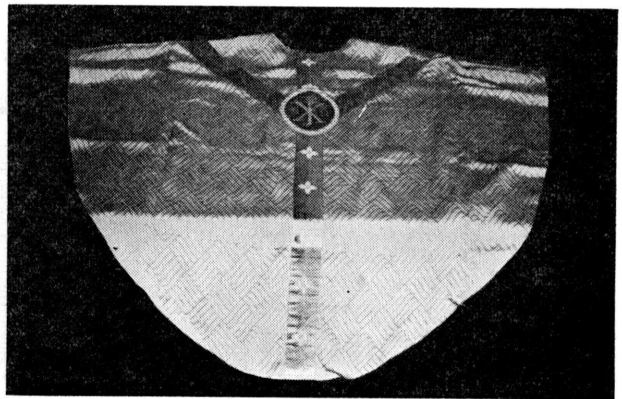
カズラの材料は絹, あるいは綿絹の交織で作られ, のちに絹のピロードなどの, 高貴な織物を使用した。装飾も高貴さを旨とし, 中世を通じ, 織師, 縫箔師とともに腕を競つた。12世紀までは材料の色については, 教会規定は必ずしも厳守されなかつた。カズラはローマの習慣では脊面に縦縞の飾り, 前面に, 十字架形の縞を有していたが, ドイツやフランスの習慣では反対に脊面に十字架の縞, 前面に縦縞の飾りがつけられる。前面にY形の装飾をつけるのは, 中世型のカズラで, それは,



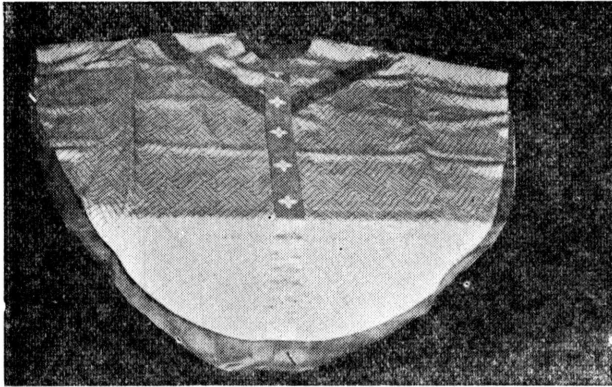
第 17 図



第 18 図



A 図 Casula 脊面

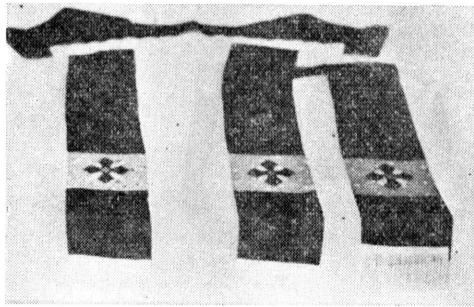


B図 Casula 前面

すでに10~11世紀の鐘形のカズラにみられ、13~14世紀には最も好んで用いられた飾りである。今日ではミサ聖祭と聖体行列にのみ用いらたている。このカズラの脊面の十字形の飾りはキリストの軛を意味するものである。高位僧侶のカズラの寸法は第3ミラノ会議(1565年)により、丈を158cmと定め、腕を被うところは幅を93cmにすることを決定した。前部の内側には脊にたれ落ちぬように紐をつけて結んだ。

祭服の色

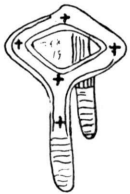
昔は礼拝には白麻の単純な衣服を用いたが、インノセント三世時代(1161~1216年)に至り初めて、礼拝用の色が規定され、キリスト降誕日には白衣、殉教者祭には赤、大祭日に関係のない三位一体日には緑色、克己節と死者追悼日には藍色、または黒色衣を用い、時には暗青色衣も用いたが、マリアの祭日及び、大天使祭日には藍色を用いる事が多かつた。現今は白衣の代りに、錦欄、又は金色の絹衣を用いる。



C図 Stola と Manipulus

パリュム (Pallium)

羊毛製の円い一つのバンドで、その前後にある両方に、同じ生地地、短いたれがついている。その表面の6カ所に十字架が織られている。これを着用するのは、法皇及び、大司教のみに許され、典礼上の徴標として、カズラの上に着用される。第19図は大司教のパリュムである。パリュムの実写として世に残る最古のものは6世紀に属するものが一番古く、幅は3指、長さ約3mの紐である。



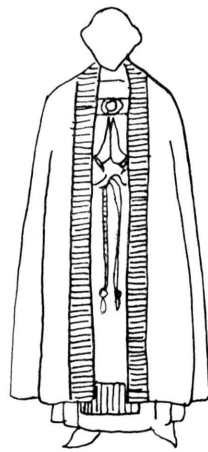
第19図

6世紀にいたり、もとギリシャ人が、オモフォリオンと称した、紐の上部を、6世紀頃から縫い合せ、その垂れた両端は、前後とも足にまで達した。

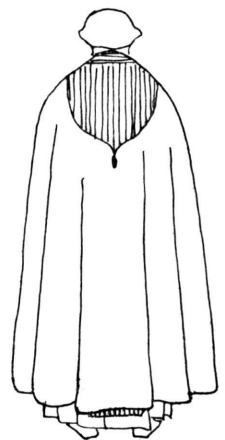
のち、この形よりは、少し丈は短くなつたが、この紐は11世紀に至つても、パリュムとして僧正間に使用された。

中世時代のパリュムは11世紀に現われた形のもので、専ら行われ、17世紀になつて始めて今日見る如き短いものになつた。

ケーブ (Cape)



第20図



第21図



D図 Cape 前面



E図 Cape 背面

幅約3mの半円形のマントのことである。ケープは初め数世紀の間に頭巾をつけて、雨具として、一般に用いられたが、10世紀頃にはすでに僧侶の服として用いられていた。

形は全くカズラに似ており、カズラと反対に、ケープは前開きになっており、胸の前で留金で閉じ、頭巾もつけた。13世紀以来はケープにつける頭巾は、本来の用を失い、そのままかざりとして残り、楕形の装飾がつけられている。

16世紀後半には派手にする風が起り、材料も美しく、多くの模様をつけ、さらに、刺繍をほどこした、従つて、貴重なビロード又は、絹で作られた。

行列、聖体降下式の如き、祭列にはカズラが用いられないので、ケープが上衣として使用される。15~16世紀には、ケープの裾を曳き、行列のさい、後からもたげさせた。この風は17~18世紀には、再びすたれ、現在では、長曳裾のケープを着るのは法皇に限られる。

## 附 記

附属服飾類については、紙数の関係上、遺憾ながらこの度は省略した。

おわりに、貴重な資料を提供された。上智カソリック・セトルメントのミヘル・アロイジオ神父、カトリック教会のエングラチス及びパトリシア両シスターの諸氏、並びに研究に協力された横山美智子、海原桃子の各位に深甚の謝意を表す。

また本学では、被服科学生の卒業論文と併行して、その復元模型(古代より第19世紀にわたる)の製作が順々に行われており、はなはだ小規模ではあるが、復元 Collection を集成して、西洋服装史実証の一助としたいと努力を重ねている。

## 文 献

Carl Köhler; Die Trachten der Völker 1871

Mary. Houston; Ancient Greek Roman and Byzantin Costume.

同 ; Mediaeval Costume in England and France.

Planché; Cyclopaedia of Costume Vol 1. Vol II.

Forbes 原著, 田中訳; 技術の歴史

Cunnington; Dictionary of English Costume.

Bruhn & Max Tilke; Pictorial History of Costume.

Gerstnes; Das Verhalten der Direktziehenden Farbstoffe gegen Tierische Fasern, Cellulose u.

東京家政大学研究紀要第2集

Kunstspinfasern.

Wilcox; Mode in costume.

Hermuth Bassert; Peasant art of Europe and Asia.

Amsler; Europe, a visual history.

小野務著; カトリック史要論

上智大学編纂; カトリック大辞典